中国地区英語教育学会研究紀要No 8 (1978)

クウェートの英語教育

広島大学大学院
高　塚　成　信

I　概　観

1　言語・教育的背景

クウェートは，西アジア，アラビア半島基部に位置する，人口約995,000(1975)の独立国である。住民の殆どはアラビア系でイスラム教徒であり，1970年の調査によると，当時の人口約739,000 のうち47%がクウェート人で，残りの38%がパレスチナ人であり，公用語はアラビア語である。とは言え，英語及びインド大陸の諸言語を話すインド人或はパキスタン人の共同体もかなりの数存在する（①：1）。

母国語教育には力が注がれ，10才になるまでに，子どもはかなりうまく母国語の読み書きができるようになり，アラビア語とコーランとの強い結びつきは，アラビア語に非常に高い地位を与え，その結果，子どもは大抵の実用目的のためには母国語で充分足りるということを知っているのみならず，母国語に誇りさえもっている。さらに，過去においては，帝国主義勢力に対する敵対心が，特に英語とフランス語といった外国語の学習に悪影響をもたらしてきた（⑤：105－106）。

しかるに，クウェートの英語或は英語文化との接触を歴史的に顧れば；1793年にイギリス商館が現在のクウェート市に設けられたことに端を発し，その後1899年から独立する1961年までイギリスの保護国であったこと，1950年代の英米資本による原油の発見と採油，英語が不可欠なコミュニケーションの手段となっているインドとの密接な商業的関係，及びイギリス或はアメリカの大学への留学生の漸増といった諸事象が，言わば英語学習の歴史的必然性を支えているように思われる（③：253－254）。

さらに，現在の外的な諸要因，例えば，英語の日常生活への浸透があり，それらが子どもの好奇心を掻き立て，英語学習に対する動機づけの高揚に寄与していると考えられる（①:2, ⑤：106）。つまり，現在クウェートにおいては，英語に対する高い政治的，経済的及び学問的依存度からくる英語学習の必要性が，阻害諸要因を凌いでいるように思われる。

2　英語教育史点描

クウェートにおける最初の近代学校 Al Mubarakiya は，1912年に設立されたが，そこでは，3R's 及び宗教教授が行なわれ，当時英語などというunorthodox な教科が教授されようなどとは想像もされなかったという。しかしながら，控え目ながらも，1919年にアメリカ人宣教師Calverleyによって，英語教授が彼の自宅で開始された。けれども，1934年まで続けられたどの時期をとっても生徒数は45を超えなかったと見られ，公教育にまで発達することはなかった。

すなわち，本格的な英語教育の開始は，1936年の教育委員会設立を待たなければならず，初等7年，中等4年とする教育制度の確立を契機に，英語は初等学校の4年次，つまり9才から EFL として導入されるようになり，週あたりの時間数（1授業時間は平均40分であると思われる）は7～9時間で，8年間教授された。なお，1947年には，ロンドン大学の入学試験に備えるために中等教育課程を1年延長する特別教育課程が設けられたが，そこでは9年間英語が教授されたことになる（③：254－255）。

その後，1956年度から6才就学の4（初等）－4（中間）－4（中等）制に移行し，英語は必修科目として中間学校の1年次，すなわち以前の教育制度下より1年遅れて10才から，中等学校の3・4年次の理科系の週7時間を例外として，週8時間，8年間に亘って教授されるようになり，現在に至っている。また，中等学校3・4年次の文科系では，第2外国語として週3時間フランス語が教授されると共に，特別研究という授業に週3時間が充てられ，英文学も含まれているのであるが，その教授内容についての詳細は解らない（③：255，⑦：742，⑧：250）。

LL は，1962年に初めて男子中等学校に実験的に導入され，1967年には，各々36ブースをもつ LL が男子及び女子中間学校に設置された。そして，1968年から1970年まで，中間学校1年生を対象に，週8時間の英語授業のうち2時間が LL での練習に充てられ，普通教室で用いる教材に基づいた発音練習と文型練習が用意され実験研究が行なわれた。その結果，sound recognition, sound descrimination 及び correct sentence-pattern recognition の諸学習において LL が効果的であったことが報告されている（④：136－145）。しかしながら，その後どの程度或は如何なる内容で LL での教授が行なわれているかについては，手許に資料がないので明らかにできない。

II 教授法・教科書

クウェートにおける英語教授法は，歴史的に見て，1963年以前の第1期と，それ以後の第2期とに大別することができる。第1期には，語彙の蓄積が重視され，黙読が早期に導入され，翻って conversational fluency は無視された。その帰結は，中等学校修了時においても低い英語力しか得られず，英語学習者側に英語教育に対するルサンチマンが募り，英語教育に対して否定的な態度を形成してしまったようである（③：255－256）。

第2期は，伝統的教授法の時代に別れを告げ，構造主義的教授法の時代に入る。W.S.Allen と Ralph Cooke 編の 'Living English for the Arab World, Books I-IV' というコースブックが中間学校で用いられるようになり，耳と口を中心とした教授法で，語彙よりも構文に重点が置かれ，その結果，第1期と比較して，学習者の oral fluency は伸びた。なお，このコースブックに反映されている教授原理は，

1. 可及的に，言語材料を場面の中で提示すること
2. 場面的，文脈的，並びに機械的ドリルを融合すること
3. コースブックの最初の2巻ではより多くの対話を盛り込むこと
4. 絵，フラッシュ・カード等の視覚補助教具を使用すること

5. 現物とその他の視覚教具を使用すること

6. 授業に変化をもたせること

の6点である（⑤：108－109）。

教授法に関しては，口頭段階から読み書きの段階への移行を如何に行なうか，すなわち，後者の段階に移るにつれて語彙数が増加することによって学習者の興味が失なわれるといったような問題が残されており，日本の現状にも似て，英語学習を必要とする好意的な環境にありながら，英語教育の効果はあまりあがっていないようである。

Ⅲ 教師・教師教育

1936年の教育委員会設立に伴って，初めて教師及び教育家がエジプトその他のアラブ諸国から送られてきたことが象徴的に物語っている如く，クウェートにおける教師の自給自足が不可能な状態は，1966年にクウェート大学が設立され，中間学校の教員養成機関も存在する現在まで続いている。中間及び中等学校の英語教師の場合もその例に漏れず，僅かの例外を除いて英語母国語話者でないことは言うに及ばず，現在85％以上がクウェート人以外のアラビア人によって占められている。また，英語教師の学歴については，70％がアラブ系大学の英語学士号取得者，25％が教員養成機関の卒業者，そして残りの5％が中等学校しか卒業していないという現状である。質については，大学卒業者の場合，全般的には英語力は高いが，oral fluency が低く，特別に外国語教授法の講義や訓練を受けているわけではないのに対し，教員養成機関の卒業者は，少しばかり教授法等の訓練を受けてはいるものの，英語の全般的な能力が低いとされている（③：256－258，⑤：107）。

さらに，中間学校の英語教師の週あたりの授業時間数は24時間であり，中等学校教師の16時間と比較して負担が重く，しかも教師の英語力が相対的に低いことが，益々クウェートの英語教育を非効果的なものにしているように思われる（⑤：104，107）。

これらの情況を改善するために，British Council 或はその協力のもとに文部省が，現職教育を行ない，中間学校英語教師の spoken English の能力の向上を目指している。また，それぞれの中等学校に少なくとも1人の TEFL の教育を受けた英語母国語話者を配置するといった案が考えられるが，思うように進展していないようである（①：2）。

Ⅳ 考 察

クウェートにおいては，Gardner & Lambert（②：266－272）の用語を用いれば，社会的環境から考えて，インドなどと同様に（⑥：261－273），道具的動機づけが統合的動機づけにもまして，学習促進効果をもっと考えられるが，そのような折角の社会的必要性から生じた英語学習に対する興味や関心に，教授法や教師等の諸要因が否定的に作用し，英語教育を非効果的なものにしているように思われる。

すなわち，クウェートの英語教育が直面している問題は，学習者の興味・関心を持続させ促進させる教授法の開発と，教師の質の向上が中心となるように思われる。加えて，1956年以前に行

なわれていたように英語教育を9才から始めるのが良いのかという英語学習最適時期に関する研究がなされる必要があろう。

最後に，今回扱えなかった，母国語であるアラビア語と英語間の干渉の問題，class size の問題或は中等学校の英語教育の実態及び中間学校と中等学校における英語教育は如何に連携されているかといった問題の解明が，今後のクウェートの英語教育研究の課題となるであろう。

〔引用文献〕

① English Teaching Information Centre. 1974. *English Language Teaching Profile: Kuwait*, pp. 1-4. (Mimeo.)

② Gardner, R.C. and W.E. Lambert. 1959. "Motivational Variables in Second-Language Acquisition," *Canadian Journal of Psychology*, Vol. 13, pp. 266-272.

③ Kharma, Nayef. 1967. "The Teaching of English in Kuwait," *ELT*, Vol. 21, pp. 253-260.

④ ____1972. "Children and the Language Lab–An Experiment in Kuwait," *ELT*, Vol. 26, pp. 136-145.

⑤ ____1977. "Motivation and the Young Foreign-Language Learner," *ELTJ*, Vol. 31, pp. 103-111.

⑥ Lukmani, Yasmeen M. 1972. "Motivation to Learn and Language Proficiency," *LL*, Vol. 22, pp. 261-273.

⑦ 日本ユネスコ国内委員会（1963）『世界の中等教育』，「クウェート」，pp.741－744

⑧ 須田八郎（編）（1974)『世界の学校教育』，「クウェート」，pp.248－252. 第一法規

〔参考文献〕

星山三郎（1968）「A・A諸国における外国語教育」，『東洋女子短期大学紀要』№2, pp.1－17.

Ministry of Education, Public Relations. 'Education in Kuwait 1969-1970.'

_____. 'Education in Kuwait 1974-1975.'

Ministry of Planning, Central Statistical Office. 'Kuwait Review 1977.'

Qubain, Fahim I. 1966. *Education and Science in the Arab World*. The Johns Hopkins Press.

『世界大百科事典』第8巻（1972）平凡社

『世界教育事典』（1972）帝国地方行政学会

『ブリタニカ国際年鑑 1976』TBSブリタニカ